

## ▶ S-KYT研修を実施して ◀

### 名古屋市消防局

#### 1. はじめに

名古屋市は明治22(1889)年に市制が施行された面積約326km<sup>2</sup>、人口約230万人の中部圏における最大の政令指定都市です。伊勢湾の湾奥部に面し、木曾三川を流域に持つ広大な濃尾平野の河口に位置し、日本のほぼ中央にあります。東西の結節点として東西交通の要所となり、国内有数の国際貿易港である名古屋港を抱え、経済・海上物流の一大交易圏となっています。

また、市内では東京までを約40分で結ぶリニア中央新幹線の平成39(2027)年開業へ向けた準備が始まりました。

本市は、1900年の歴史を持つ熱田神宮や、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三英傑のゆかりの地でもあり、名古屋城においては、本丸御殿の修復が進められるなど、新旧の魅力あふれるまちづくりを現在、本市は進めています。

#### 2. 消防団の概要

名古屋市の消防団は、昭和23年10月1日「名古屋市消防団条例」を公布するとともに、「名古屋市消防団設置規則」を制定し、各小学校の通学区域ごとに消防団を設置しました。昭和24年3月31日に、市内に101の消防団(定員4,000名)が発足し発足当時から全国的にはめずらしい多団制を設けています。

平成10年10月1日からは女性消防団員の登用(52名)を開始し、平成28年4月1日現在では386名の女性消防団員の方々が活躍しています。

また、今年度から、基本消防団を補完する機能別消防団として、名古屋市マイスター消防団と名古屋市大学生消防団が発足しました。名古屋市マイスター消防団は、平成27年度から実施しているマイスター教養(可搬式ポンプ、救急、

自主防)の専門的な教養を修了した消防団員で組織されており、マイスター消防団員の技術と知識を、他の消防団員や市民、そして地域により効果的かつ効率的に浸透させるために設置しました。大学生消防団は主に、消防団行事への参加や、地域住民へ消防・防災知識の普及啓発と消防団に関する広報活動を行います。基本消防団と連携し、消防団活動や消防団運営に若年層の視点を導入し、消防団のさらなる活性化を期待しているところです。

平成28年4月1日現在、本市消防団は266の基本消防団(定員6,820)と、本年度から機能別消防団として発足した、マイスター消防団(定員811名)と大学生消防団(定員50名)で組織されています。

#### 3. S-KYT研修に至った経緯

本市においては、平成2年から主に消防団長及び副団長を対象に消防団の幹部教育(幹部課程)を開始し、消防団活動は基より、管理、運営能力の向上、安全管理の徹底を行ってきました。

しかし、平成20年に発生した火災において消防団員の殉職事故が発生し、この事故を契機に本市では消防団活動での、安全管理体制をより一層強化することとしました。その一つの取り組みとして、平成21年度から幹部教育に「S-KYT研修」を導入しました。安全管理に対する教養を継続して行うことが、公務災害を減らす一つの手段と考え、本年度もS-KYT研修を上級指揮課程<sup>\*</sup>(旧幹部課程)で開催したところです。

<sup>\*</sup>上級指揮課程

消防学校の教養訓練の基準第10条 指揮幹部科分団指揮課程に準ずる教養

名古屋市では上級指揮課程として行っています。

#### 4. S-KYT研修を実施して

平成28年7月3日(日)に実施された、上級指揮課程の中で、S-KYT研修(3時間コース)を開催しました。各消防団の団長、副団長を中心に参加した40名の団員を6グループに分けて行いましたが、参加した団員は、日頃から部下団員を指揮・監督する立場であるため、今回の危険予知に対する訓練を非常に前向きに取り組んでいました。そして、「グループ討議することで細かな危険要因を教養することができる」、「団員間で意識を共有する事ができ、事故を防ぐ一つの手段になる」、「指差呼称をすることで、再確認でき確実な行動につながる」など有意義な感想が寄せられました。

また、受講後は参加者がそれぞれ在籍する消防団に今回の研修で習得したS-KYT訓練を持ち帰り、その後、団内で訓練を反復実践する



平成28年度研修の様子

ことで危険要因を体感しより確実な事故防止に努めているところです。

言うまでもなく、消防業務は、緊急性かつ危険性が高い災害現場に出動します。災害現場で事故を未然に防ぐためには、S-KYT訓練を浸透させることが現場活動の危険要因を把握する効果的な手段と考えています。

#### 5. 今後の取組について

今回の講習において、受講者からは「S-KYT訓練は事故を防止するため非常に有効な手段である。」と高い評価を得ています。消防団員が誇りとやりがいを持って消防団活動を行うためには、自身の安全は自らが整え着実に守っていただかないといけません。今後も、事故を未然に防ぐ極めて有効な手段であるS-KYT研修を引き続き取り入れていきたいと思えます。



平成27年度研修の様子



平成 26 年度研修の様子



平成 25 年度受講者写真



平成 24 年度研修の様子



平成 23 年度研修の様子



平成 22 年度研修の様子



平成 21 年度研修の様子